

令和5年度

教育学部

社会人選抜

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 この問題冊子は、表紙を含めて5ページ、解答用紙は4枚、下書き用紙は1枚である。  
試験開始の合図があってから確認すること。  
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあった場合は、手をあげて監督者に知らせること。
- 3 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を記入すること。  
氏名を書いてはいけない。
- 4 解答は、指定された解答用紙に記入すること。  
指定された解答用紙以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
- 5 配布された問題冊子および下書き用紙は、試験終了後に持ち帰ること。

次の資料を読み、以下の問いに答えなさい。

問1 国際調査から、子どもの自己肯定感について日本と欧米ではどのような違いが見られるか、200字以内で説明しなさい。

問2 日本の子どもたちが世界の中で活躍していくために、①教師はどのように児童・生徒と接するべきか、②学校教育の在り方をどのように再構築していけばよいか、について1,200字以内であなたの考えを述べなさい。

解答は横書きで書くこと。

## 資料

### 国際調査にみる、欧米人の自己肯定感の高さと日本人の低さ

日本の子どもたちの自己肯定感の低さがよく問題にされますが、ほんとうに日本の子どもたちはほかの国々の子どもたちと比べて、自己肯定感が低いのでしょうか？

日本ではアメリカに留学する人が多いようですが、アメリカに留学経験のある人が口を揃えて言うのは、アメリカの学生がみんな自信満々にものを言うのに圧倒されたということです。たいていの日本人は、アメリカ人の自信満々な態度に驚くのではないのでしょうか。

そこには文化的要因が深く関係しているのですが、それについてはのちほど触れることにして、まずは実態をみていきましょう。

国立青少年教育振興機構が2015年に「高校生の生活と意識に関する調査」を実施しています。その報告書をみると、「自分はダメな人間だと思うことがある」という項目に「とてもそう思う」、もしくは「まあそう思う」と答えた高校生の比率は、アメリカでは45.1%なのに対して、日本では72.5%というように著しく高くなっています。

また、内閣府は2013年に「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」を実施しています。その調査は、各国の13歳～29歳の青少年男女を対象にしています。その結果をみると、「私は自分自身に満足している」という若者の比率は、アメリカ86.0%、イギリス83.1%、ドイツ80.9%、フランス81.7%というように欧米諸国は8割を超えているのに対して、日本は45.8%と極めて低く、半分に近い比率になっています。

この2つの調査結果を盛り込んだ「日本の子供たちの自己肯定感が低い現状について」という参考資料が、2016年10月28日に開かれた第38回教育再生実行会議に提出されました。

こうしたデータが、日本の子どもや若者の自己肯定感が低いことの証拠とみなされ、自己肯定感を高めるための施策が検討されているわけですが、それは文化的背景を考慮せずに調査データの表層しかみておらず、大きな勘違いにもとづく見解と言わざるを得ません。

さらに、もう少し新しい調査データをみていきましょう。

内閣府は、2013年と同様の「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」を2018年にも実施しています。その結果をみると、「私は自分自身に満足している」という若者の比率は、アメリカ87.0%、イギリス80.1%、ドイツ81.8%、フランス85.0%というように欧米諸国は前回同様8割を超えているのに対して、日本は45.1%と前回から上がることなく極めて低く、欧米諸国の半分に近い比率のままになっています。

日本では、自己肯定感を高めるために積極的にほめるなど、さまざまな試みが行われているにもかかわらず、欧米との歴然とした差は一向に縮まる気配がありません。

同じ調査で、「自分には長所がある」という若者の比率をみても、アメリカ91.2%、イギリス87.9%、ドイツ91.4%、フランス90.6%と欧米諸国は9割前後になっているのに対し

て、日本は 62.2%となっており、欧米諸国のほぼ 3 分の 2 にすぎません。

国立青少年教育振興機構が 2017 年に高校生を対象に実施した国際比較調査の結果をみても、「私は価値のある人間だと思う」を肯定する比率は、米国 83.8%、韓国 83.7%、中国 80.2%に対して、日本は 44.9%と極端に低くなっています。「私はいまの自分に満足している」を肯定する比率も、米国 75.6%、韓国 70.4%、中国 62.2%に対して、日本は 41.5%であり、これまた極端に低いと言わざるを得ません。

さらに、内閣府による「子供・若者の意識に関する調査」は、13 歳～29 歳の男女を対象として実施されていますが、「今の自分が好きだ」という若者の比率は、2016 年の調査では 44.8%、2019 年の調査でも 46.5%となっており、相変わらず自分を肯定する若者は 4 割台にとどまっています。

「今の自分に満足している」という項目は 2016 年の調査にはありませんでしたが、2019 年の調査では、これを肯定する若者は 40.8%にすぎず、6 割が今の自分に満足していないこととなります。

### 欧米人の自己肯定感の高さを見習うべきか

どの国際比較調査のデータをみても、欧米人の自己肯定感の高さは疑いようもなく、それに比べて日本人の自己肯定感は著しく低くなっています。

そのようなデータを根拠に、日本の子どもや若者の自己肯定感を高めなければならないとして、さまざまな取り組みが行われています。それにもかかわらず、前項でみたように、日本の子どもや若者の自己肯定感が高まる兆候はみられず、欧米人との差は一向に縮まる気配がありません。

そこで、いったいどうしたら縮めることができるか、どんな方法を用いたら日本の子どもや若者の自己肯定感を高めることができるかが真剣に議論されていますが、私は、そんなことを気にする必要はまったくないと思います。その根拠を示しましょう。

前出の国立青少年教育振興機構が 2015 年に実施した「高校生の生活と意識に関する調査」には、「私は、勉強が得意な方だ」という項目もありました。それを肯定する者は、アメリカの高校生は 65.6%なのに対して、日本の高校生は 23.4%にすぎませんでした。3 倍近い開きがあります。

では、こうした自己評価は、学力の実態を反映しているのでしょうか。

それを確かめるために、OECD（経済協力開発機構）が 3 年ごとに実施している学力の国際比較調査「生徒の学習到達度調査（PISA）」の結果をみてみます。

その調査は、各国の 15 歳の生徒を対象として、「科学的リテラシー」「読解力」「数学的リテラシー」に関するテストを実施しています。大雑把な言い方をすれば、毎回日本は総合的にみて上位に位置し、アメリカは中間から下位あたりに位置しています。具体的にみてみま



しょう。

2015年の調査結果をみると、アメリカは科学的リテラシー24位、読解力24位、数学的リテラシー40位となっています。日本は、科学的リテラシー2位、読解力8位、数学的リテラシー5位で、アメリカよりはるかに優秀な成績となっています。

2018年の調査結果をみると、アメリカは科学的リテラシー18位、読解力13位、数学的リテラシー37位となっています。日本は科学的リテラシー5位、読解力15位、数学的リテラシー6位で、読解力こそ並んでいるものの、総合的にみればアメリカよりはるかに優秀な成績を収めています。

イギリス人もアメリカ人と同じような傾向を示しています。

このように、日本の生徒はアメリカの生徒よりはるかに学力が高いにもかかわらず、アメリカの高校生の65.6%が自分は勉強が得意だと答え、日本の高校生で自分は勉強が得意だと答えた者はわずか23.4%にすぎません。

**出典：**榎本博明『自己肯定感という呪縛』 青春新書 2021年 より一部改変









下書き用紙

見本